（大正十四年八月十三日第三種郵便物認可）
昭和二年八月十日印刷納本
昭和二年八月十二日發行
（毎月一回十二日發行）
第六卷第七號

眞生

第六卷　八月號

◇◇◇◇◇◇◇

□充分に實のらない殼物をどんなに多く集めても、それはやつぱり實のらない殼物に過ぎないやうに、錄でもない人間がどんなにたくさん集つても、それはやつぱりつまらない一つの集りに過ぎぬ。

□それと同じく、つまらない人たちの徒らな努力はそれが如何に多くの努力であつたとしても、それは亦やつぱりたゞつまらない一つの努力に過ぎない。

□だから、私たちの爲すべき多くの仕事は、いつも實のある力の生活でなければならない。眞實に生きるとは即ち眞に實のある生活を云ふのである。徒に實のない、力なき生活はそれは値打なき徒勞であります。

□世には徒に多數決を以て物事を定め、又勞少くして功多からうとするものも多いのであるが、多數決が必ずしも眞理でなく、爲し得べきことを爲さずして功のみを求むる如きは價値としての生活ではありませぬ。（念）

◇◇◇◇◇◇◇

ラゴラの出家

（佛を見る者　二）

土屋觀道

一、

次に私の心にいと深く感じたものは印度の詩聖タゴールの令弟が書いた「佛陀及び佛陀の救い」と云ふ本の中にある佛畫の二三でありました。其の中の一がこゝに云ふ「ラゴラの出家」であります。

夫は今しもラゴラが釋尊の處から出家して、母親の許に歸つて來た所でありました。ラゴラは出家を喜ぶかの如く、其の母は出家を悲しむかの如く見えました。それも單なる喜びでなく、偏に釋尊の人格にあこがれて其の父を慕い、又其の道を喜ぶ佛弟子の姿であります。乍然それに引きかへ、ヤスダラの姿には限りなき謂知れぬ悲しさと淋しさと靜かさとの内に、また何となく恐れとおの、きと驚きの中に或る偉大なる何者にかに擊たれたるもの、如くに見るものがありました。

私は其の初め、たゞ一つの佛畫として何の氣なしに見たのであります。然るに其の畫を靜に見入ると共にそれが釋尊の子ラゴラが釋尊のもとで出家して、其の母の所に歸つて來た所であるといふことを知るに至つて、私の心は忽然として、再び新しき注意をその上に注ぐのでありました。而して此の佛畫は一体何を私共に示してゐるのでありませう。私は今その時に感じたる私の感じを、そのまゝにこゝに筆して見るのであります。

先づ私の眼はヤスダラの上に走せ、そしてヤスダラの生涯に私の心は走せたのでありました。彼は其の初め、當國第一の美男子として、天下に輝く皇太子の妃として釋尊の許に來た人でありました。自分の美しさはもとよりでありましたが、夫よりも更に輝く夫釋尊の美しさには限りなき崇高の人格の光りさへ輝いていたのでありました。さなきだに、當時ときめくマカダの國の國王のたゞ獨り子としての皇太子の妃となつて、戀ひ慕ふその人の妻となることはヤスダラに於て、無上の光榮でなくて何でありませう。然るに事實は之に反して其の喜びも束の間となり、それらの望みも夢ときにて、釋尊の出家はヤスダラをして寧ろ絶望悲痛の苦境に陷して來たのでありました。まして其後一國の政事もまゝならず、一城傾き一國亡ぶるの姿を見たヤスダラに、釋尊を思ふの念の一層深きものがあらうこともまた容易に知り得べきことであります。茲にヤスダラが唯獨り子のラゴラをして、釋尊の片身として愛育し、之に將來の一國を治めしむべく努力したと云ふことも亦當然の道であります。從つて、ヤスダラが其の子ラゴラに對して、如何に愛着の念の深いものがあつたかは之亦想像に難くないことでありませう。

二、

そして亦、ヤスダラが自ら釋尊のもとに行かずして、先づその一子ラゴラをして、其の父を訪はしむるところ、私はそこに東洋婦人のやさしい、而も尊いあるもの、ひそめるを、ヤスダラの爲め泣かずには居れないものを感じました。それは久々に夫に合ふことを自らはにかむわけでもありますまいが、彼は其の心を其の子ラゴラの上に含ませて、其の釋尊を訪ねせしめたのでありました。其の時のヤスダラの心には一体何がこもつてゐたでありませう。そこには確にヤスダラの想いの全部がこもつて居つたに違いありません。さうして其の想いが一体何であつたらうと云ふことを、ヤスダラの心情に同情して之を眺め來るとき、そこにはいそ〳〵としてラゴラに着かへさせたり、靴をはかせたりするなかに子を想

ふヤスダラの愛情はそれそのまゝが夫釋尊に喜んで貰はうとの心でなくてなんでせう。そしてまた、そこには釋尊を戀し、釋尊を愛し、釋尊を慕ふ、妻としてのヤスダラの心情がその子を通して表はされてゐたらうと云ふことを誰がはゞみうるものがありませう。色々と父の前にかうせよ、あゝせよと、ラゴラにそのなすべき行儀を敎ゆるにも、夫を慕ふ妻として、ラゴラを思ふ母として、其の全力を注いだことを誰が否定し得ませうぞ。七年も八年も全力を注ぎヤスダラの其の子を育てた一切の骨折りも、此の時ばかりは其の一切を忘れたことでありませう。

永らくの間一人手に其の子を仕立てゝ、今初めて其の子を父のもとに送る母親の心、私はそれをヤスダラの上に見ずには居れないものがありました。それは單に子を想ふ母親ではなくして、かくすることによつて、其の父を喜ばせ、其の父の喜ぶを見て、其の喜びを喜ぶ其の妻の暖かき情けであります。

而もヤスダラが此の心を以て、自ら夫を訪ねずして、其の子ラゴラをたゞ一人父のもとを訪ねせしむるところ、やさしき婦人の仕打ちとして、女性の光を見せられる。而もそれが、やがてラゴラの出家となることも知らずしてかういそ〳〵として、其のまごゝろをこめてゐるのかと思ふとき、誰か之に對して一滴の涙なきものがありませう。そしてまた、それとも知らないで、ラゴラを出したヤスダラが、其の釋尊を想ふ心とラゴラを想ふ心とを以つて、其のラゴラの歸りを待つの心をば誰か彼の爲めに泣かぬものがありませう。

三、

然に、之に酬ゆるに、釋尊は何を以てせられたか。それは唯、其の子ラゴラを出家せしむることでありました。未だ佛法の何者たるかも知らないヤスダラに、而も釋尊一人の出家さへ、彼には限りなき悲しみであるものを、たつた一人の賴り子を、またしても出家せしむると云ふことは、はたしてヤスダラに堪ねうることでありませうか。今やラゴラの出家は一家相續の斷絶であり、又一國その主を失ふ前提ではないか。而も一家の斷絶、一王の衰亡は忍ぶべしとして、それではたして一國の民はどうなるのであらうか。

それにもかゝわらず、釋尊は己に其の子をして、此の事實をラゴラの上に實現せしめたと云はねばならぬ。ヤスダラが限りなき悲痛の中に、限りなき絶望と驚きとを以て此のラゴラの出家を見たことは未だ佛法の何たるかも知らないヤスダラの心に正に當然のことであるといはねばなるまい。

斯くの如く想い來たれば今ヤスダラが、ラゴラの出家を見て、限りなき悲しみと淋しさとそれにもました驚きの眼をみはつたと云ふことも、亦あながちに無理からぬことであります。

加之、ラゴラの出家は又永久に其の住いをその母と別れねばならぬでないか、そしてまた現に、ラゴラの心は其の母を愛しないのではもとよりないけれども今や少くとも其の出家によつて其の母のふところを離れて、父親のもとに行つてゐる。そしてまた、そこには母親の悲しみも驚きも全く知らない有樣である。彼は母親の手もとに育てられ、母親の上なき慈愛に生長し、而も母親を何よりの賴りとして今日まで來たではないか。そしてまた、それを母親は誇りとし、又喜びとし、力ともして來たのであつた。然に今突然のラゴラの出家、それが如何にヤスダラをして、悲痛の感に入らしめたかは思いやるだに同情の極みであります。夫を戀慕ふ妻の心に、其の子に對して、わが夫を其の子の父として、紹介し、父の人格の高さを知らしむるといふことは決してあり得ないことではない。そして又、それによつて、其の子が其の父を愛し、父を慕い、父のもとに行くことは其の人の妻として、又其の子供の母として、決して悲しむべきことでない。否、それどころか、自分も亦それをこそ眞に喜ぶ可きものである。乍然それがために、母を去つて遠く父親のもとにのみ行つてしまうと云ふことをどふして喜ぶことができませ

う。

四、

乍然、飜て、釋尊の境地を思い至るとき、そこに輝く佛陀の自覺は忽然として、之等の悲想を消失せしめて、更に永劫に輝く眞人の光を見るのでありました。

オ、、如何に釋尊の人格の偉大なることよ、そして、其の人格は永劫に人類の光として、一時一國のことを超越して、遠く万古に輝く宇宙至尊の光りであつたのでありました。人と云ふ人の中に、誰か釋尊の偉大さに觸れないものがありませう。彼は正しく、眞人の領域を離れて更に高く神としての生活を自已自身の上に体現せられたる人であつたのでありました。天地の眞理も寧ろ釋尊によつて示されたと云ふ可きであります。否少くとも人として、眞に生くべき眞人の生活は正に此の釋尊によつてこそ、眞に宇宙の生命が現はれて居るのであります。若しも釋尊なかりせば誰か宇宙の生命を、人として、眞人の生活にまで說き及ぶものがありませう。釋尊は實に宇宙の生命として、眞に人としての神の出現であつたのであります。而も其の偉大なる釋尊の人格が此の一ラゴラの出家の上に圓然として現はれてゐるのでありました。

今や釋尊は自は佛陀の自覺として、全く佛陀の生活に立つてゐられるのでありました。從つて、釋尊の一生は今後一切が佛としての生活であります。單なる人情や、單なる一國の消長に左右せられずしてあらゆる人類とあらゆる國家とを指導すべき第一原理に立ち働くの神人の生活であつたのでありました而して其の釋尊の自覺がラゴラの出家ともなつて現はれたのでありました。佛陀世尊ともあらう釋尊が我が最愛の妻の人情も知らないと云ふわけはないのであります。そしてまたラゴラの出家が一家の斷絕となり、又王位繼承の斷滅となること位の判らないはずはないのであります。而もそれにもかゝわらず

釋尊の行動がラゴラの出家として現はれて來たといふことは、今日の印度の衰滅人類の墮落に批較して始めて其の眞相を見ることができるかに思はれるのであります。

諸行は無常である、諸法は無我である。而して涅槃のみ寂靜であるのに、何を悲しみて、其の徒らなる世俗の人情や國政に未だ悟らないラゴラをして、そこに置く必要があらうか。茲に於て、ラゴラの出家は正に無常の俗界を離れて、正しく常樂無爲の宇宙の大道に立つたと云ふ可きであり、ヤスダラの悲しみは悲しみに違いはないが、それは未だ此の眞狀を知らない世俗の惱みに過ぎないのであつて、世俗の惱みが必ずしも眞人の生活を妨ぐることのできないものであることを示す、將來の佛陀の示しを誰が之を否定し得るでしよう。而も此の眞理は今や釋尊を經て二千五百年、正に巨の如き光を以つて、偉大の風光は此の間に輝いてゐるのであります。

五、

私はかつて、此のことに就て深く考へたことがありました。然るに今またこの佛畫を見て、今更のやうに昔の想いが此の畫を通して新に復興して來たのでありました。

而して其の時に私は思いました。見よ人類よ凡そ人生を！人の肉体はしかく永遠のものではない。たゞその道に生るもの、みが永生ではないか。朝に咲いて夕にしぼむ朝顏は一度開いてはまた永劫に開くべき機會もないが、而も其のたつた一度の機會に於て彼は永劫に悔いない光を放つ。それは彼が全力をさゝげて咲いた花としての光である。而してそこに其朝顏としての永劫の價値もあり、亦そこに朝顏としての生命もある。此の意味に於てラゴラの出家は正に人類の踏む可き眞人の世界を私共に明示してゐるではないか。而して、そこに又釋尊の偉大なる世界が見ゐる。茲に至つてラゴラの出家とヤスダラの歎きとはまた限りなき如來の慈光として吾人の心を引つける一大恩寵となつて來るのであります。

私に二人の小供があります。而して私は思いました、凡そ人の親たるもの正しく、此の釋尊の如かるべしと。私の小供に對する態度は此の釋尊がその子ラゴラをして剃髪せしめたやうに、其の子の頭髪を剃るといふことではありませんが。少くとも世尊が其の子を出家せしめたと同じ精神に於て、其の子を子たらしむることだとの覺悟を起したことでありました。言換ればラゴラの出家は一時の慾望や、一時の喜びにあこがれずして、常に永生の道に吾人が立つべきことを示したものでありました。そして此の意味を眞に顯はしたものが此のタゴールの佛畫であります。人にこそ言はざれ、私の心にはかうした思いで此の畫に接して思ひふけらざるを得なかつたのであります。

（八、四）

冥想

佐藤生

靜かにも暗い朝だ
私は靜座して冥想する
釋尊基督孔子……
永生の道を歩んだ無量の人々
それが私の心にはつきり感ぜられる
永生の人々は常に生き生きてゐる
彼等は人類のあらんかぎり
生き生きてゐるであらう……
私はそこに輝ける佛陀を見る
そしてそこに歩みゆく私の父を見た
耳四郎もそこにゐた
私とともに泣いてくれてゐる
彼を……
私は明らかに見ることが出來た。

唐澤山を下りて

演阿彌

自ら信仰に入つたと稱し乍ら、もう八年にもならうとして居る。然も自分の爲した跡を振り返り見る時おのづから悔恨の涙が滲じんで來る。不甲斐ないと笑はれても事實は事實として告白せざるを得ない。見樣に依つてはまだ正しい信念が培かはれて居ないとも云へる。否な寧ろまだ本當に如來がわかつて居ないと云ふ方が正しいであらう。昔は如來にあくがれては寸時も忘れ得ざる時もあつた。しかも我が爲す可き使命が、理想としては明かに向ふに光りを放つて居る樣ではあるが、余りに我が力足らず我が信念の弱さを思ふ時あきたらぬ我が身の不甲斐なさ不徹底さが悔まれてならぬ。

道を求めんと立願してより余りに永き時は流れ去つた。時のみは徒らに流れて行く。いたましい事だ。然も求道の歩み遲々として寂寥の感頗りに湧くを如何ともし難い。

一昨年の唐澤には一足遲れて登山したが、或る障りの爲め直ぐ下山して仕舞ひ、昨年も其關係から參加し得なかつたので、いつしか唐澤へのなつかしき思ひも薄らいで行く樣であつた。

煩惱の雲厚うして三密の窓暗く、無明の谷深くして六凡の巷に迷ふ。人間の生を得てより茲に四十有余年、徒らに私は我が身心を弄び過ぎた。或時は笑ひ或時は悲しみ或時は貪り或時は疑ひ或時は慢り或時は悔んで、我と我所とに心は結ばれて行くのみであつた。

それでも近來頗りに悔恨が繰返され、寂しき如來への思ひが續いたのも、一種云ひ知れぬなつかしさが自らを慰めて呉れないでもない。

さはれ。今年の唐澤は私に取つて近來にない感銘の深かつた別時會であつた。實は內心心ゆく斗

りジックリ念佛を味はつて見たいとも思つて居つたので、廿廿一兩日の名古屋での義務を果して神谷鷲津の兩君と一緒に廿二日の朝から念佛に加らせて貰つた。かくて私は先着の方々の熱心なる念佛にほだされて私の寂しい心もいつしか明くなつて行くのを喜ばずに居れなかつた。

廿七日の朝で前行結衆を打切つて各地からの諸君を歡迎す可くいそ〳〵と心斗りの準備をなし出迎の爲めに下山をした。而して西東の濠車に送られて來る多數の道友を迎へた。舊知の山崎小倉谷口渡邊岩下今井淺野其他の諸兄に遇ひ得たのもうれしい事であつた。

越後大垣名古屋浦賀佐屋津島燒津擧母大阪神戸東京横濱清水上諏訪等來り會するもの百貳拾三名尙ほ其他の人々で百三十余の生靈は集ひに集つた夫れでも秩序井然として一糸乱れず元氣ある青年の燃ねに燃えた求道の烈火、炎々として天を衝くの氣慨するどく爲めに天地震動するかと思ふ斗りであつた。

朝四時から晩の九時迄、班を分ち當番を定めて夫々分擔の仕事に何等の不平もなく休みの時間も思ひ思ひ念佛にいそしんで居る尊い道友の姿を眺めては恐らく涙ぐましくならぬ者はなかつたらう私も其一人である事を告白し得る事を嬉しく思ふ

一日二日三日と過ぎ行くまゝに何時も乍らとは云へ、上人の法話は益々冴え益々白熱化されて行く。道友の宗教的感情は高鳴りして「我れ誤てり」と叫ぶ者、「我れ信を得たり」と喜ぶ者、歡喜の涙の中に我が如來の慈光は悉く凝り集つて玆に渾然として天地に滿つる一大白蓮華を出現せしめたかの感に打たれざるを得なかつた。

四日目五日目の頃は結衆の全体は如來の大悲に催されていづれも足なへる者は立ち盲いたる者は眼開きて、聞法歡喜の涙に一切の惡魔は退散し一切の煩惱は清められつゝ百福莊嚴の如來慈光裡中唯だ一つ念佛歸命の聲に統一攝化され行く其悉皆成佛の姿が此上もなく尊く偲ばれたのであつた。

かくて六日の夜には茶話會を開いて各自の感話や告白を語合つた。恐らく百貳拾名皆悉く語りたかつたであらうが、五分間と限られた時間を何れも十分十五分廿分と永くなつて六時間半を費やして僅かに三十幾名、或は涙の中に或は喜びの中に僞らざる眞實を發揮したのも嬉しい事であつた。かくの如き感激は夫れぞれ清き尊き信仰の烙印として各自の胸に永遠に消え失せないであらう。而して本當に永劫の光りとなり行くであらう。

偖て道友の事は暫く措き私自らの事に就て少しく語らしめよ。かくの如き熱心なる道友諸君の驥尾に附して至らない私も感激の日を續け得た事を嬉しく思はずには居られない。

私は親不孝者である。全身全靈皆な悉く如來の慈悲に依つて構成され生かされ行く身であり乍ら夫れを少しも思はず唯我儘勝手斗りして居るのだ而して分に光を放つ事能はず徒らに菩提を求むる事にのみ氣を用ひ心を惱まして居たのは矢張り何時しか大憍慢と云ふ惡魔が巣喰ふて居たからであらう。夫れも畢竟は如來の大悲心に薫せざる故である。大悲我心に薫せざるは本當に念佛して居ない証據である。本當に念佛し得ざるは念佛の意義に徹せざる故である。念佛の意義に徹せざるは如來を信ずる事淺さが故である。嗚呼、我れ過まてり。

さらばよ。我は今正に我が越し方の我れを懺悔し、靜かに念佛を味ひて強く深く如來の大悲に感激しつゝ利物の道にいそしんで行かう！。

私は今にして始めて念佛の味を知り得た事を喜ぶ。今迄の念佛は無暗矢鱈で本當の味ひを知らなかつたのだ。否な味ひの出る程まだ念佛して居りもせぬ癖に生意氣な事を云つて居つたのだ。噫々我れ過まてり。一切の同胞に對して大膽に何等慮する處もなく如來の大悲を說き得ざりしは本當に情けない信仰であつた。否な信仰の紙袋を被つて居つたのかも知れない。夫れも一面自分の弱さ臆病さと口不調法との個性に影響されて居るとは云へ、まだ本當に信仰に徹せず本當の敬虔さ本當の歸命合掌が出來なかつたからだと云ふ事は疑へない事實である。

いつも別時に激勵されては「是からだ是からだ」と思ふが、今度こそは心から深く深く「本當に出直して行かう」と決心せざるを得なかつた。本當

に是からは毎日ジツクリと念佛の中に如來の大悲を味つて其大悲に動かされた氣分を僞りなく多くの人々に語り傳へたいものだ。已れの眞實に生き行く道を已れのみ知つて、他の多くの知らざる同胞に傳へ得ないのは、やつぱり自分が眞實に生きて居なかつた証據であると恥かしくてならない。

私は私自らを胡麻かす事は出來ない。隨つて人からは大に何とか譽められる事が好きであり乍らいつも其處に屹度或る行詰りを感じて苦しいうめき聲を心耳に聞き而して悔恨を繰返へして行く。喜びも悔恨も共に憍慢の心より生れ出た產物である事を知らない。私に此の憍慢なかりしせば、この樣な小人ではなかつたであらう。而してとうの昔に如來の一人子とし働き手として喜ぶ事が出來たであらう。

又た私は私自らをよく知つて居る。一番よく私の不徹底を知るものは恐らく私自身だと思ふ。私は私の中に本當に如來を宿らして居らず。如來を向ふに追求しては自らの働きを厭つて居る。此處に私の弊の大なるものあるを知る。君子は弊らずと云ふが、私は常に私を弊つて居るのである。「我が佛性を殺すものは我なり」。オ、恐ろしい殺人罪よ。私は如來を殺し我が佛性を殺して居たのである。

又私は思ふ。私は元來なまけものであり横着者である。隨つて藥罐の樣に時々沸騰はするけれども、直ぐさめて行き冷にて行く。かくの如くして一進一退しつ、一生を終るかと思ふと其淺ましさが遺瀨なくてならないが、夫れもいよいよ冷たくなり行きつ、益々懈怠道への誘惑に引きづられて行く。現在の一念を怠る人是れ一生を怠るの人である事を知り乍ら惡魔の誘惑に誘はれて行く。

聖者善導は憍慢と弊と懈怠とは以て其法を信じ難しと私達の事をスツパヌイて居るが、私は此文を讀む毎に何時もヒヤつとして冷汗と赤面とを禁じ得ない。

今更乍ら「噫々我あやまてり」と繰返し繰返し如來の前にひれふさねばならない。今迄の私は此不信の法として擧げられた三つを最も完全に保持して居たのだ。今後どの邊迄此の三法から脫げ得らる、か疑問であるけれども、實はもう夫れから拔け出さなければどうもかうもならぬ時機に際會して居るのだ。而して夫れは念佛に依つてのみ出來得ると確信して居る。

私は悔んで斗りは居らない。私は非常に喜んで居る。今度の別時は近來になく私をして幾度も幾度も感激せしめた。入信當初の別時以來殆んど味ひ得なかつた程の信仰への目覺めがあり、今迄知らなかつた甘い甘い念佛の甘さがハッキリ体驗された事を嬉しく思ふ。然し其嬉しさは變調的な感情高潮の嬉しさとは違つてジッと靜かに嬉しき其者を味ひ得る嬉しさであることを嬉しく思つて居る

余り長くなつたから別時中に感じた歌の二三を摘錄して惜しい筆を置かう。合掌。

南無と呼ぶ聲もろともに罪の身を
　あみだほとけにまかせぬるかも

み光りの中にすむ身は罪とがも
　清き心の糧にぞありける

照らさる心の姿恥し、
　盡十方の御光の中

いろ〳〵のゑにしを合せ生きる身を
　このまゝ慈悲の姿とぞ知る

千よろづの心々ろの結ばりて
　我と覺にしことの恥かし

かくまでも育くゞまれ行く我身ぞと
　うれしき露に袖ぬらしけり

眞生同盟の組織化に就て

唐澤別時中に於ける各地代表者の申合せ

横濱山崎氏の提案に依り眞生同盟の組織化に就て本年七月唐澤三昧會に參加せる各地代表者は大略左の如き申合せをなせり。或は豫め全國的に各地方に於ける幹事の參加を願ひ申合せをなす可き筈なりしも

其余祐なかりし故或は決議として公認し難しとの意見あるやも知らざれども眞生を中心とし如來の慈光に動かされての申合せなれば宜しく御宏量を以て御許しを得たく更らに明年の好期に於て御腹藏なき改善を斗られたし。

一、眞生同盟の組織統一連絡

各地に於ける眞生運動としての旋回をして其儘大なる旋回の下に置く即ち分擔の中に一大協調を保つ可き必要ありと認む、是等の具体的方法は各自互に考慮して意見の交換をなす事。

二、暫定的意味に於て眞生同盟聯合事務所を置く事

上人の傳導日割は毎年豫め豫定表を作り又は上人と直接照會の上定められたるものも其會所より聯合事務所へ報告をなす事。

講演の回數　聽衆の人員等御報告を願へれば其地方に於ける消長を一目の下に知り得て其傳導の根本方針に就て大なる參考となるべき事と信ぜらる、聯合事務所を當分の間、清水市清水實相寺に置く事。

三、唐澤別時會を全國的別時會とする事

各地に於ける支部の代表は毎年唐澤別時には必ず參加して諸種の申合せ決議をなし漸次此の運動をして大ならしむる樣改善をなす事。

四、各地方に於ける會名に就いて

現在眞生同盟支部を名のるもの又は光明眞生會其他名稱を異にせる處あり、多少統一を欠く嫌ひなきにしもあらざれども各地方に於ける事情及び會の歷史等に依り急に變更し難き点有るを以て眞生同盟を脊後に置き暫定的に其地方に於ける從來の名稱を用ひる事を認むる事。

五、本部は好機會を以て全國各支部の決議に依り根本中堂を樹立する事

以上

吾朋便り

□東京　土屋觀道

近頃の暑さ皆樣には御變りも在りませんか、若しや御病氣では無いのかと案ぜられてなりません。殊に近頃の暑さに於て御病床の方々に對しては少なからず御不自由のことも多くいらせますことと一層案ぜられてなりません。定めし御不自由のことでせうね乍然それも亦致し方のないことです、願くば一切を如來の慈光に打任かせて、たゞなすべきことの中にのみ精進努力を願ひます。病める者が休むのも働ける者が働くとは其の價値に於て同一です眞人の生活には働くのも、休むのも同價値です。何故かなれば一切が慈光の中にあつて爲す可きことを爲して居るからでありますよしあしも皆み佛の慈悲なれば南無阿彌陀佛の中にこそあれと私は歌いました。

次に今度の唐澤の三昧會は已に昨年からきつと參加の人々も多からうと豫想せられてゐました。然しそれでも百人を越えやうとは思いませんでしたのに、其の實は百二十三名の參加者と其他七八名の臨時參詣の人々を加ふれば優に百三十名を超ねるの盛況でした。而もそれが單なる老人の避暑客氣分の集りであるのでなくして、何れも急がしい仕事の中から、夫れを打切つての人々が特

▼吾朋便り

□大阪　三木惠敎樣より

近來は時折いろ〳〵と懺むと云ふ程にもなく氣分も淸爽裡に經驗する事柄に出値ひ仕候本月始よりは外出もいたし候お召のある日までは手に叶ふ仕事の殘り居ることかと存じ候先ば御禮まで

□大阪　豐田省三樣より

家內が又男子を分娩いたした樣な事で家中が一層こた〳〵と取込んで居る次第でございますお蔭樣で兩人とも肥立ちもよろしく一同悅んで居るのであります、實は如來樣より又一人育てよとの仰せを頂戴いたしました事と家內が產の氣がつきました時などにも私自身といたしましても入信前の樣な家內の安否につき不安の念を持ちました樣な事もなく先づ如來前にみあかしを上げ香を焚き私自ら佛前に單坐させて頂き如來樣のみ子を御さづけ下さる自らの責めの大なる事を思ふと共に家內の出產に對する不安と云ふものが更らに浮びませず必ず安產させて頂き得る事と深く信じ切らして頂き一種響へ樣のない壯嚴な氣分に充ちて呱々の聲を聞き得ました事は今日迄に無く

に多かつたと云ふ事と、夫に今一は殆ど參加者の凡て青年中心で且つ働き盛りの人々の甚だ多かつたと云ふ事は私共の將來に對する力强さを感ずるの一つでありました。中には歳をとつた方々も全々無かつたのではありませんが、乍然それらの人々も眞生の氣分に充たされて應分の活動に自らの價値を發揮しやうとの覺心で下山せられたと云ふことは私共の衷心から喜びに堪へない所でありました。更に之を昨年の別時に比較して、道友の心に自已の生活を反省して、眞實に自已を生かさうと云ふ傾向の非常に力强く現はれて來たと云ふ事はこれ又私共の感謝に堪えぬ所であります

次に其の他の全國に於ける道友、並に本誌愛讀の諸彦の方に對し一言申さして頂きたいことは私がかうして皆樣の安否を尋ね、永劫に眞生の道に立たれんことを衷心から祚つて止まぬ心であります。かうして直接にはお目にはかゝらずとも、靜に皆樣を心に思い浮ぶれば、過ぎし昔の一切が今目前の中に現はれて、共俱に相語るのと同じであります。願くば未だお目にもかゝらぬ人々にもいつかは共に語る日のある事をお互に心から樂みたう存じます

次に私の一家でも一同無事でゐますから乍他事御安心下さい。美智子も七才、良子も四才となりました。かうして樂しく慈光の中に暮して行くことのできますのも、偏に如來の御惠みと皆樣の廣恩によることと衷心から感謝して止みません。

体驗でありました、出産が濟みますと共に直ちにお勤をさせて頂き阿彌陀佛を一卷あげさせて頂きまして靜かにお勤を濟ませた後嬰兒に初對面をいたした樣な次第であります、之と申すも上人の御指導の賜と存じまして深く御禮を申上ぐる次第であります。

□越後　長澤嘉一郎樣より

今年は例年より四五日遲れて、唐澤のお別事が始まりましたので、私としても夏休みとの關係上、この上もない好機でありましたにもかゝはらず、又あの尊い空氣に接することを得ませんでしたのは何より心苦しく、日に何度となく思ひ出して胸が突かれる樣な感がいたします。

私は平常、たゞ一分でも一寸でも人格を高めたい高めたいと思ひます、一方にまた生活の安定を得ればならぬと思はれます、生活の不安でおびやかされる時は嫌やな感じを持ちます、そしてこの考へに反した現象が表はれると一變して人生とは何ぞやと言ふ問ひに引きつけられます。

この答は到底私には解決し得ないので、別に親鸞上人の眞似をするではないけれど、お念佛すれば總てが解決されると言ふ、うそか本當か知らない、けれど私としてはとるべき道がない。

もしお念佛して救はれなくつても、もとつぴき、救はるれば何よりの幸、けれどお上人樣が私をだますとは思はれない、如來樣をありがたく思ふ時は、心は柔かに、私は仕合せであるとつく〴〵感ぜられる、その時は人生とは何ぞやなぞと言ふ問ひは出て來ない。たゞ嬉しく柔らかである、それでいゝ、それで結構だ、それが解決だ、私のとるべき道、進むべき道は矢張り南無阿彌陀佛であつたと思ふて涙ぐまれる時があります。

□神戸　鶴田昌造樣より

次第に各地に先生の御信仰が擴がりつゝあります御有樣を拜し眞に喜びに堪へません、そして御教へを受けて少しでも目をさまさせて頂いた私共は深き反省と絶へざる努力とに眞實の道に精進せれば勿体なう御座います、とは云へともすれば是に反する道に引き入られ勝の自分を見てまことにすまないことで御座います。

◈唐澤別時念佛三昧會結集芳名

昭和二年自七月廿八日至八月三日

東京市芝公園地十四ノ九　土屋　觀道
同　神田區江川町五　神谷善之進
同　日本橋區濱町二ノ十一　小倉　彦六
同　神田區富松町四　谷口　年泰
同　神田區江川町神谷方　田中　しず
同　京橋區加賀町八　協信社　青井　辰應
同　横濱市海岸通五ノ二十　山崎　作藏
同　中村町稻荷山下　西川　新八
神奈川縣浦賀町芝生　河野ツタ子
同　荒卷　中野　久藏
同　宮下　舊井　せつ
同　洲崎　黑岡　靜子
同　新町　石井　文子
同　吉井　山田　英子
同　久里濱村八幡　長島はつ子
靜岡縣清水市　實相寺　中村　辨康
同　志太郡燒津町城腰　片山　とき
天野　源一　前田甚一郎
同　光心寺　北山　忍良
名古屋市中區末廣町一ノ一九　鷲津　太一
同　御器所町鳥喰　伊藤　留吉
同　南鍛冶屋町　渡部善兵衛
同　みさを　淺野　孝眼
西區千歳町崇德寺
眞下　孝照
同　隅田町　百々治之助
同　東批把島町一九七　小林　すみ
同　青井　辰應
同　東區南外堀町十一ノ九七　中川五十子
同　東外堀町二ノ二　佐藤　忠義
愛知縣海部郡佐屋村佐屋　黑宮　平八
同　ふい子　同　孝壽　瀧澤　愚佛
同　南陽村茶屋　熊澤憲之亟
同　津島町的場　中野　善英
同　豐橋市ハザマ　友田　しま
同　新川町　伴　かね
同　西加茂郡擧母町　成田安次郎
同　きよ　本多　かづ　同　壽江
同吉田國三郎
三重縣津市上濱町　阿部喜兵衛
岐阜縣大垣市郭町　桑原　省三
同　本馬場町　大橋　こう
同　西田町　渡部　蝶子

岐阜縣大垣市外側町　滿岡　せい
同　岡崎　友子
同　鳥見町　淺野寅次郎
同　武　同　美知子
同　鳩部屋町　服部　一男
同　室町　馬淵　章
同　蝶子　同　久子
同　千代　同　佑比古
同　本町　和田　政子
同　安八郡和合村津　增田儀三郎
同　中川村　小川　すみ
同　揖斐郡大野村黑野　所　友子
同　西郡村瀨古　小林かほる
同　山田　淨專　同　旭町一丁目　會田　柾
同　川合村加納　栗野　準一　同　枇杷島　箕輪　嘉一
同　和夫　同　岬町　後藤　泰次
大阪市天王寺區東平野町眞松院　松本　壽延　春日　桑野喜太郎
大阪府堺市南旅籠町東三丁目十六松浦宇之助　本町七丁目　岩城吾一郎
神戸市生田町二丁目東極樂寺　後藤　清　港町　市川　秀次
同　山本通四丁目一二三ノ二鶴田たき子方　今村テイ　同　喜作　同　勇次郎
兵庫縣尼ヶ崎市大物町円平寺　松井　戒順　本町四丁目　大橋爲三郎
神田　隆夫　大久保　西川　健三
新潟縣柏崎町廣小路　柳橋　栗林　一郎
同　登世子　渡邊八右兵門　本町三丁目　阿部平八郎
同　岬町　高橋　孝一
長野縣松本市新橋　本町四丁目　岩下　祥兒
同　松枝　同　ミエ　同　圖
同　旭町一丁目　小林　イシ
同　四ッ谷　吉岡　ワキ
同　見付町　今井　善吉
同　源一郎　皆川　秀吉
刈羽郡南鯖石村　佐藤　益章
同　ハヂメ　同　忠典　同　宏
岡村　常一　大倉千代平
上小國村　山岸　甚郎
北條村　小林源一郎
野田　實

同　上諏訪町湯小路　山田　竹子
同　上町　藤森　美鶴
同　桑原町　飯田セイ子
同　安藤　百重
同　泉町　山崎　芳子
同　本町　吉田　芳子
同　上諏訪郡平野村　今井　三造
同　上諏訪町唐澤山　阿彌陀寺
同　宮澤　說忍　長田イサム
同　桑原町　藤森　嘉久
同　上町　上條　次郎
同　ほつれ　桑原町　河西長次郎
同　松尾明三郎　島田　靜雄　安藤もと子

定價一部十錢　半年六十錢　一年一圓
振替口座東京四七二八八番　眞生社
東京市芝區芝公園第十四號地九番
編輯兼發行人　土屋觀道
名古屋市東區東外堀町二ノ二
印刷人　佐藤忠義
東京市芝區芝公園第十四號地九番
發行所　眞生社

（大正十四年八月十三日第三種郵便物認可）　昭和二年八月十日印刷納本　昭和二年八月十二日發行　（毎月一回十二日發行）　第六卷第七號